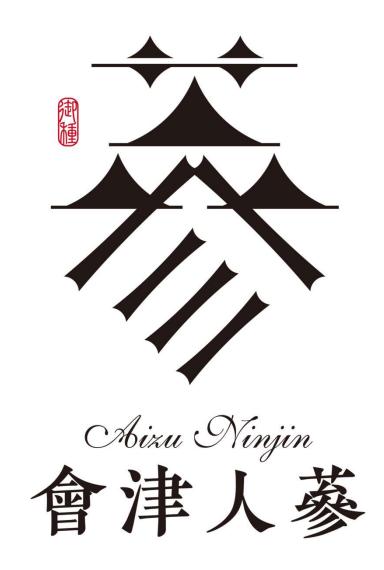
産地化取組事例紹介 オタネニンジンの生産 〜福島県〜

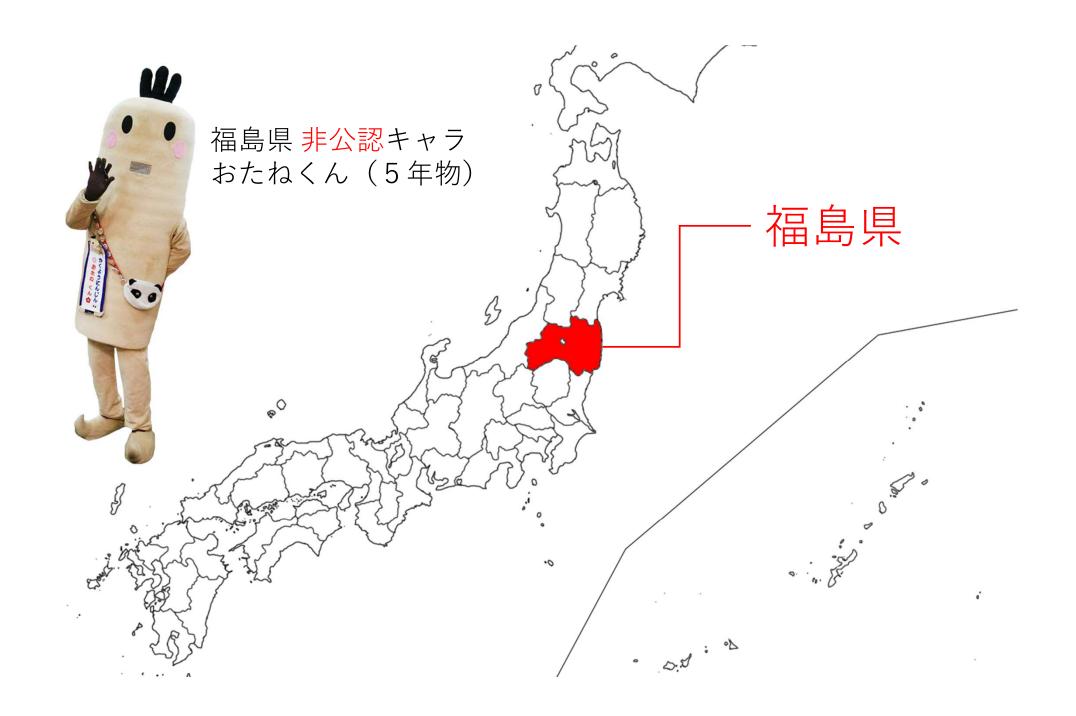
令和4年10月5日 清水薬草有限会社 Aizu Ninjin 會津人蔘

- 1.福島県の紹介
- 2. 會津人蔘の歴史
- 3. 會津人蔘の近況
- 4.福島県の取組展望



1.福島県の紹介



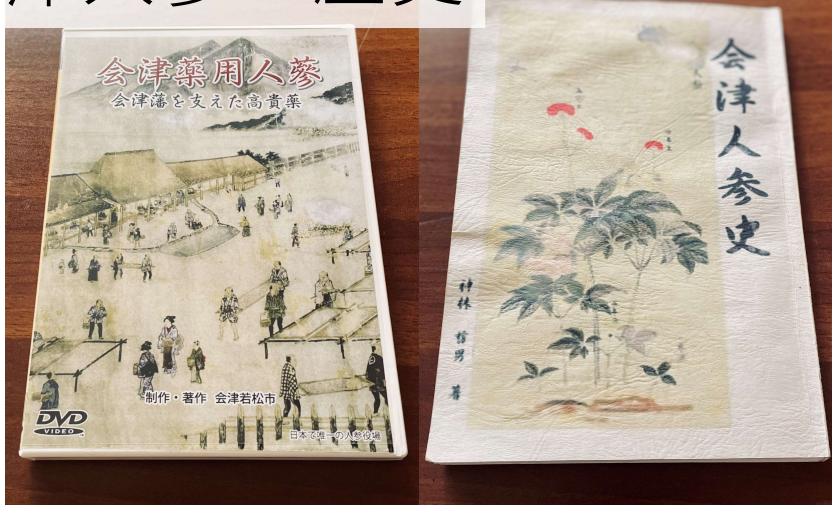


福島県内でも3つの地方で気候が大きく異なる



浜通り 2,969 km 440,222 中通り 5,393 km 1,104,579	
本は 全 市 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	人
	人
会津 5,420 km 248,342	人
福島県 13,783 km 1,793,552	人
(参考)千葉県 5,157 km 6,277,478	人





● 1592年 安土桃山時代 蒲生氏郷が、朝鮮の役の際に おたねにんじんの種子を持ち帰る。

門田町御山に植え付けた記録。御山地区は会津人蔘発祥の地。





1716年 享保元年

御薬園に幕府から頂いた

種子をまき、農民に作付けを奨めた。

● 1803年 享和3年 出雲から種子を取り寄せ、 広く栽培の普及を図った。

- ●1820年頃 文政年間人蔘栽培が広まり、加工製品を
- 大阪商人に販売した。(足立仁十郎)
- 1829年 文政12年

人蔘奉行所を設け、一切の自由栽培を禁止し、 中国や、東南アジアへ輸出を始めた。

● 1 8 6 8 年 明治元年

戊辰戦争に敗北。

藩政奉還により、民間に解放された。

一時期衰退したが、すぐに復活。

● 1879年 明治12年

島根、長野も急増。人蔘生産ブームが到来。



西側斜面を開墾し、品質重視の栽培体系。

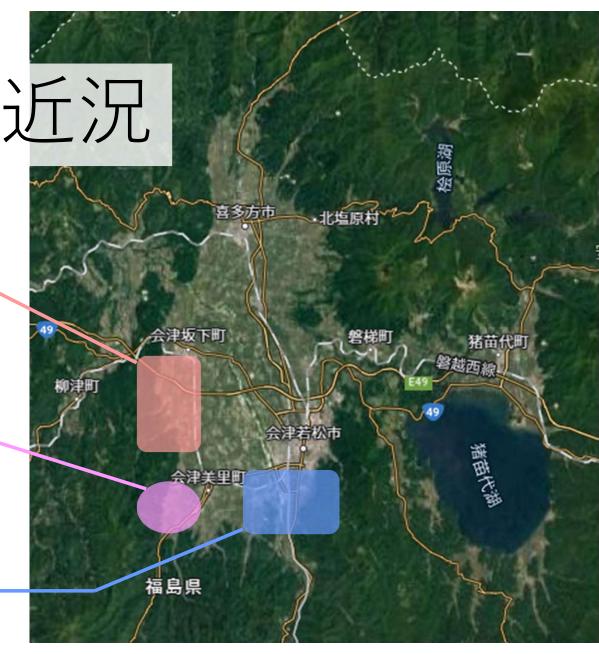
旧新鶴村、

昭和27年設立。 最多組合員数358名。

旧会津人蔘農協

機械耕耘や日覆改良など、 収量重視の栽培体系。

門田地区



- □昭和末期~平成初期
- 昭和50年に栽培農家が360戸。
- 平成5年には栽培面積が165haとなり、
- およそ半世紀ぶりに長野県を抜いて日本一。
- 2 0 1 2 年 平成 2 4 年
- 旧会津人蔘農協が解散し、
- 加工施設を清水薬草が継承した。

● 2 0 1 5 年 平成 2 5 年

会津人蔘栽培研究会を設立

令和4年9月現在 構成員26名

● 2 0 2 2 年 令和 4 年

既存の人蔘農家の減少が止まらず、

生産量も減少している。

令和2年の栽培面積はおよそ5ha。



4.福島県の 取組展望



4.福島県の取組展望

- ●食品としての利用拡大
- スーパーマーケットや県内飲食店での
- フェアを開催、かんたんレシピ制作等
- の企画により、農家の収入を確保。
- ●生産コスト低減、栽培技術の研究
- 福島県農業総合センターなど
- 研究機関と課題共有、研究協力。



4.福島県の取組展望

●農家への支援

研修会の開催や新規栽培者への種子、農業資材の提供、農業機械の共有。

●<u>漢方製剤原料として(課題)</u> 流通価格に見合うコストの削減。 生産量の拡大、安定化など。



Aizu Ninjin 會津人蔘